

中 臣 遺 跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇五 一

中臣遺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

中 臣 遺 跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路改築工事に伴う中臣遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

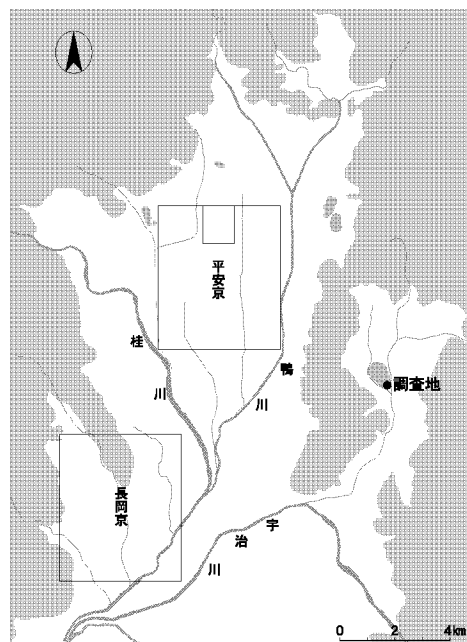
平成17年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 中臣遺跡（82次調査）
- 2 調査所在地 京都市山科区勸修寺東栗栖野町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榊本頼兼
- 4 調査期間 2005年3月22日～2005年4月8日
- 5 調査面積 45m²
- 6 調査担当者 能芝妙子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「勸修寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 能芝妙子
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と前回の調査	2
(1) 位置と環境	2
(2) 前回の調査	2
3 . 遺 構	3
(1) 層序の概要	3
(2) 主な遺構	3
4 . 遺 物	5
(1) 遺物の概要	5
(2) 土器類	6
5 . ま と め	7

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	調査区全景 (東から)
		2	北壁断面 (南から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前風景	2
図 3	作業風景	2
図 4	基本土層図 (1 : 40)	3
図 5	調査区遺構実測図 (1 : 100)	4
図 6	掘立柱建物実測図 (1 : 50)	5
図 7	出土土器実測図 (1 : 4)	5
図 8	出土土器	6
図 9	今回の調査および80・81次調査遺構配置図 (1 : 200)	8

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	6

中臣遺跡 82 次 調査

1 . 調査経過

本調査は、都市計画道路 ・ ・ 12御陵六地藏線（第2工区）道路改築工事に伴う発掘調査である。調査地は、新十条通と府道勤修寺今熊野線交差点に区切られた御陵六地藏線道路で、中臣遺跡82次調査となる。勤修小学校正門前から府道勤修寺今熊野線交差点までの南半部の調査（77次¹⁾）は平成10年度に実施した。また同小学校正門前から新十条通間の北半部は、平成11年から12年にかけて対象地の大部分を調査（80・81次²⁾）している。

中臣遺跡における既存調査では、縄文時代から古墳時代の集落・墓域などを多数検出している。調査地に隣接する80次調査では、5世紀後半から8世紀前半の建物などを検出しており、今回の調査でも当該時期の遺構の検出が予想された。

調査は平成17年3月22日から開始した。重機で盛土と耕土である褐色砂泥層を除去し、遺構面と想定した暗褐色砂泥層まで掘削した。精査の結果、調査区西側では掘立柱建物1棟、溝、風倒木痕を検出した。調査区東側では時期不明の土取穴と風倒木痕を検出した。4月6日に調査区を埋め戻し、7日から8日にかけて現場詰所と周辺設備を撤去して、すべての調査を完了した。

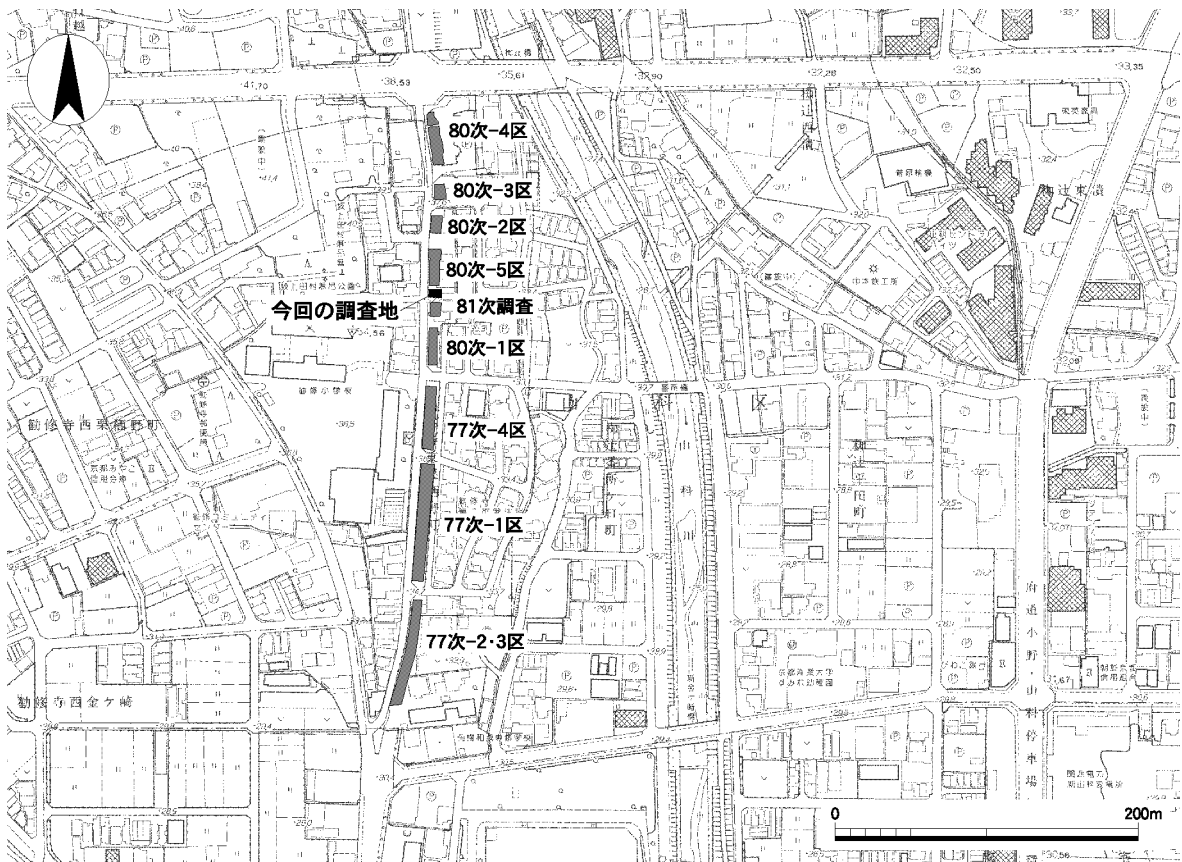


図1 調査位置図（1：5,000）

2 . 遺跡の位置と前回の調査

(1) 位置と環境

調査地が含まれる中臣遺跡は、山科盆地の南端部にある栗栖野丘陵と呼ばれている台地に位置し、約60haの面積を有する大規模な遺跡である。栗栖野丘陵は、旧安祥寺川と山科川の合流地点から北へ広がる台地で、今回の調査地は山科川に面した東側低位段丘上に位置している。

中臣遺跡のある山科盆地には地名の由来ともなった中臣氏が古くから住み着き、『帝王編年記』³⁾によれば、7世紀中葉に勢力を持った藤原(中臣)鎌足は、山城国宇治郡に「山科精舎」を建立した。また『日本書紀』⁴⁾には、天智天皇が臣下を従えて同地で狩猟したという記述がある。

同地では、1969年に地元の京都府立洛東高校の生徒が弥生土器を発見して以来、1971年から80余次にわたる発掘・試掘調査を実施している。近年の調査では、勸修寺第一市営住宅団地で実施した74次調査⁵⁾で旧石器時代の遺物が1,400点出土し、縄文時代晩期の土壌、7世紀代の竪穴住居・掘立柱建物・土壌墓などを検出している。また、勸修寺第二市営住宅団地の79次調査⁶⁾では縄文時代の甕棺墓、古墳時代の墳墓、7世紀代の竪穴住居・掘立柱建物・墓などの遺構を多数検出しており、栗栖野丘陵は古代から土地利用の痕跡をとどめている地域である。

(2) 前回の調査 (図 9)

調査対象地である新十条通と府道勸修寺今熊野線交差点間の御陵六地藏線道路では、勸修小学校正門前から南半部と北半部に分けて2度の調査を実施している。南半部にあたる平成10年度の77次調査では、5世紀末から7世紀頃の古墳の周溝・竪穴住居跡8棟、中世の西野道などを検出している。今回の調査地が含まれる北半部対象地の大部分は、80・81次調査として平成11年から12年にかけて調査を行っている。本調査対象地の北側にあたる80次調査5区では、7世紀から8世紀前半の竪穴住居跡3棟と、5世紀後半から6世紀前半の方墳、時期不明の掘立柱建物を検出しており、南側の81次調査区でも柱穴2基を検出している。



図 2 調査前風景



図 3 作業風景

3. 遺 構

(1) 層序の概要 (図4)

調査地は山科川に向かって下る台地の東斜面に位置する。そのため現代盛土がなされる以前の旧地形は、調査区の東側1/3が約70cm段状に下がっており、西側上段と東側下段では土層の堆積が異なる。

基本層序は、調査区西側上段では盛土・近代整地層の下にガラスの小片などを含む第1層(耕土)が20~30cm堆積し、第2層は8~30cmの包含層である。第3層はやや砂質の層で、調査区西側上段全体に25~45cm堆積しており、

部分的に耕作による攪拌の跡がみえるが地山である。第4層はオリブ褐色砂泥の地山面となる。

調査区東側下段には、厚い盛土・近代整地層の下に小片のガラスなどが混入した耕土が約20cm堆積し、その下は西側上段と同じ第4層の地山となる。西側上段にみられた第2・3層、整地層はなかった。

(2) 主な遺構 (図5・6)

調査区西側上段では第3層上面で遺構検出を行った。上段東端で、第3層の上に幅3m程の南北方向へ延びる整地層を検出している(北壁断面8層)。その整地面上で検出した遺構は、調査区北側では柱穴2・3・6・17で構成される掘立柱建物、調査区西端では溝1がある。他には木の根跡と思われる落込5・7~10・12・13、風倒木跡4・14を検出している。

掘立柱建物 調査区外の北へ延びる掘立柱建物は、桁行1間(1.2m)以上、梁間1間(2.7m)あり、東西方向の柱間は長く、その間の棟持ち柱の柱穴は検出していない。座標北に対して東へ若干振れる。柱穴17付近で平安時代中期の土器が出土しており、同時期の建物の可能性が高い。4個の柱穴は、掘形が径約50~70cm、深さ約4~20cmの不定形を呈する。柱痕跡は柱穴3・6・17で検出し、径約10

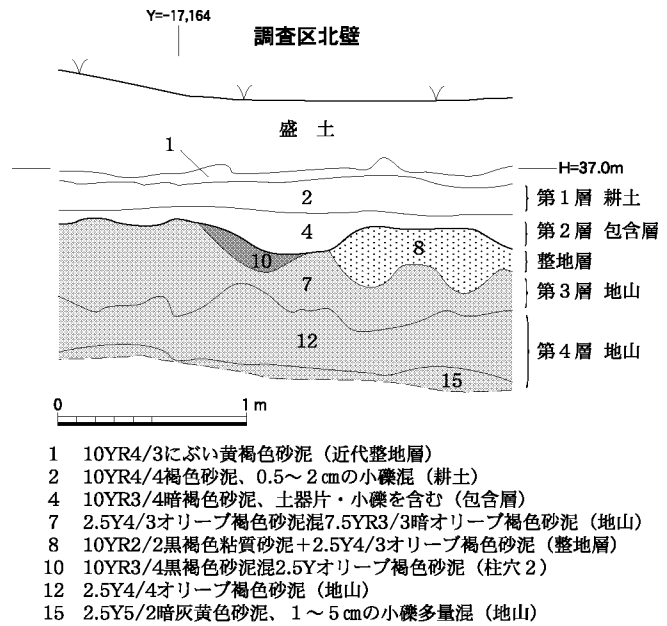
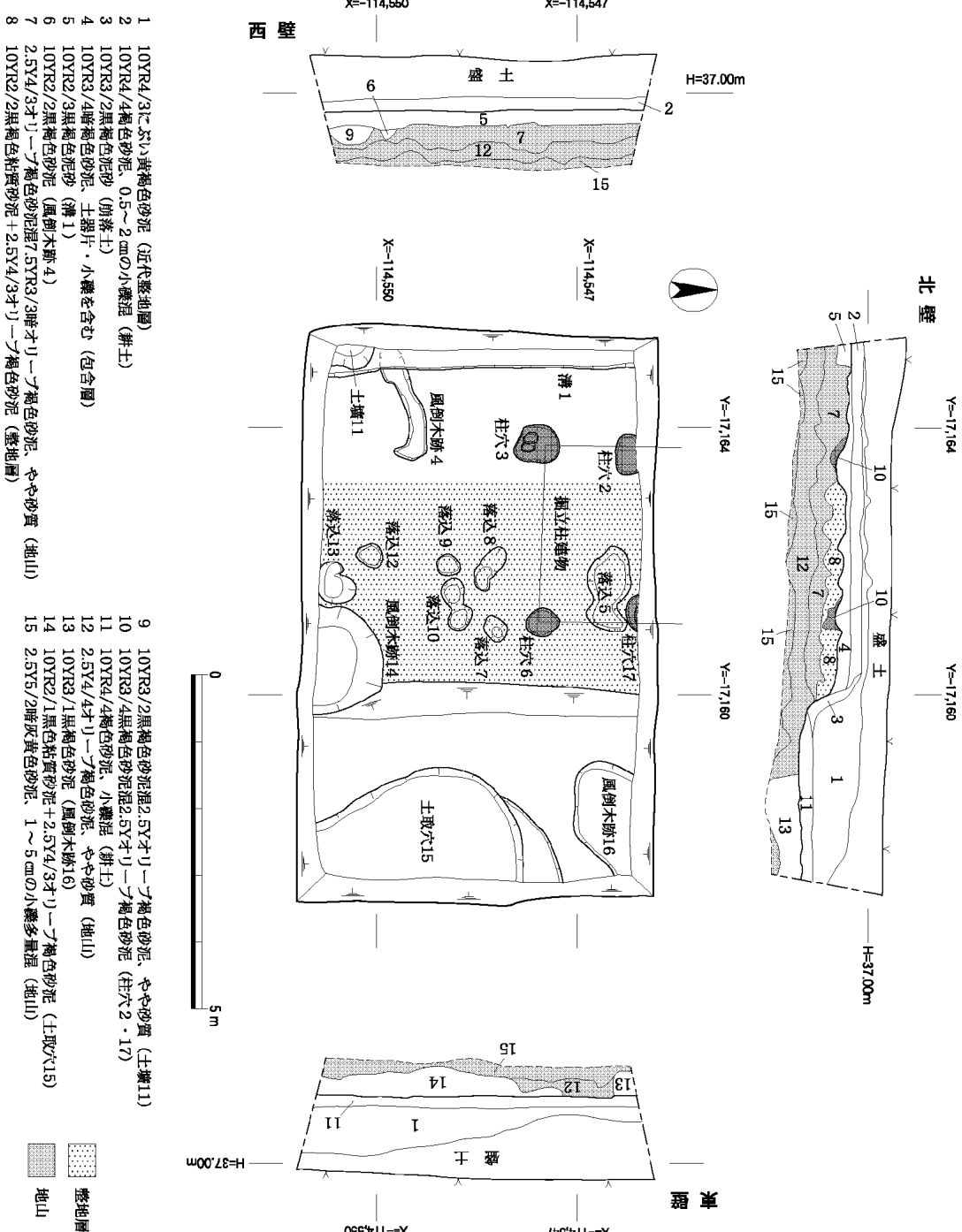


図4 基本土層図(1:40)

表1 遺構概要表

時 期	遺 構
時 期 不 明	土取穴15、風倒木跡4・14・16
平安時代中期以前	土壇11
平安時代中期~後期	掘立柱建物(柱穴2・3・6・17)、溝1



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (近代整地層)
- 2 10YR4/4褐色砂泥、0.5~2mmの小礫混 (耕土)
- 3 10YR3/2黒褐色泥砂 (崩落土)
- 4 10YR3/4暗褐色砂泥、土鍍片・小礫を含む (包含層)
- 5 10YR2/3黒褐色泥砂 (溝1)
- 6 10YR2/2黒褐色砂泥 (風倒木跡4)
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥混7.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥、やや砂質 (地山)
- 8 10YR2/2黒褐色粘質砂泥+2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (整地層)
- 9 10YR3/2黒褐色砂泥混2.5Yオリーブ褐色砂泥、やや砂質 (土敷11)
- 10 10YR3/4黒褐色砂泥混2.5Yオリーブ褐色砂泥 (柱穴2・17)
- 11 10YR4/4褐色砂泥、小礫混 (耕土)
- 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、やや砂質 (地山)
- 13 10YR3/1黒褐色砂泥 (風倒木跡16)
- 14 10YR2/1黒粘質砂泥+2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (土敷15)
- 15 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、1~5mmの小礫多量混 (地山)

整地層
 地山

図5 調査区遺構実測図(1:100)

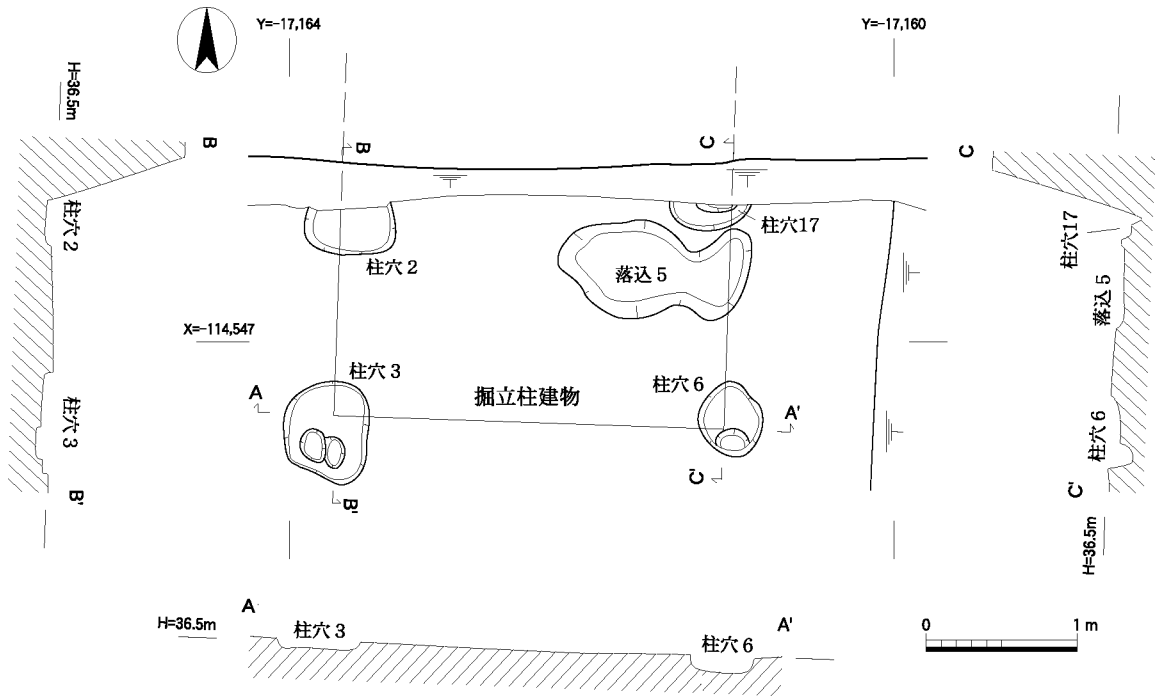


図6 掘立柱建物実測図(1:50)

~24cm、深さ約8~20cmある。

溝1 調査区西端で東肩を検出した南北方向の溝で、南北は調査区外へ延びる。主軸線が同一方向であるので掘立柱建物に伴うものと考えられる。溝1の下層から土壌11を検出したが、性格は不明である。いずれの遺構にも遺物はなかった。

東側下段では、耕土の下から第4層の地山上で風倒木跡16と土取穴15を検出した。いずれも時期不明である。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は遺物整理箱に1箱である。古墳時代後期から近代にわたる。大半は近世以降に属する遺物で、ほとんどが第2層の暗褐色砂泥層から出土している。

6~7世紀の遺物は、土取穴15から出土した土師器長胴甕と須恵器甕がある。平安時代の遺物は、柱穴17周辺から出土した土師器皿、調査区西側の遺構検出中に出土した黒色土器椀がある。また、暗褐色砂泥層からは、平安時代の土師器杯・皿や須恵器甕、近世の京・信楽系施釉陶器類、釘、ガラスなども出土している。

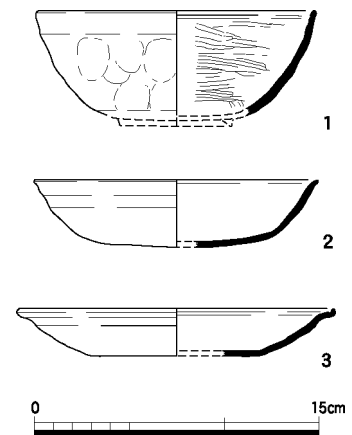


図7 出土土器実測図(1:4)

(2) 土器類 (図7・8)

ここでは暗褐色砂泥層から出土した土器類について述べる。

(1) は黒色土器椀である。復元口径14.8cm、残存器高5.5cm以上。胎土は精良で、外面は赤味が強い褐色を呈する。細かい横方向のミガキが施された内面には、口縁近くに沈線が1本巡る。



1

断面が三角形の高台が付く器形と思われる。残存率25%。

(2) は土師器杯で、復元口径15.0cm、器高3.5cm。胎土は精良で全体に黄橙色を呈し、底部は暗灰色を帯びる。口縁部は外反する。残存率40%。



2

(3) は土師器皿で、復元口径16.8cm、器高2.5cmを測る。胎土は精良で1~2mmの小礫を少量含む。口縁が強く屈曲する、いわゆる「て」の字状口縁で、大型のものである。いずれの土器も平安時代中期から後期に属する⁷⁾。



3

他には、小片ではあるが京・信楽系の椀・皿類、土師器皿、釘などが1~3と同じ暗褐色砂泥層から出土している。

土取穴15から出土した、古墳時代後期の土師器長胴甕と須恵器甕は、いずれも小片で図化できなかった。

図8 出土土器

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代後期	土師器、須恵器	2箱		0箱	1箱
平安時代	黒色土器、土師器		黒色土器1点、土師器2点		
近世~近代	京・信楽系陶器、釘				
合計		2箱	3点(1箱)	0箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. ま と め

今回の調査地は、御陵六地藏線道路（通称西野道）を対象とする連続した発掘調査の一部である。したがって、隣接した80・81次調査の発掘調査成果との関連も考慮に入れる必要がある。今回の調査でも、土取穴の埋土から出土した土師器長胴甕は、81次調査で検出された7～8世紀前半の竪穴住居跡との関連が考えられる。

また、今回の調査で検出した掘立柱建物は、80・81次調査で検出している掘立柱建物群と同方位の振れをもつことから、同時期のものであると考えられる。今回、平安時代中期の土器類が出土したことにより、80・81次調査終了時には時期不明とされていた掘立柱建物群の成立年代が平安時代である可能性が強まった。

掘立柱建物を検出している整地層は、80・81調査でも同様に検出されており、平安時代中期には栗栖野丘陵の東斜面を平坦に整地し、掘立柱建物群や溝がある程度の規則性をもって配置されていたことが判明した。

今次の調査は御陵六地藏線道路に沿った狭小な範囲の発掘であったが、前回の調査成果と合わせると、5世紀末から7世紀にかけての方墳・古墳の周溝・竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物など複数の時代にわたる遺構が確認でき、中臣遺跡の性格の一端がうかがえる成果となった。

註)

- 1) 鈴木廣司・網 伸也「中臣遺跡77次調査」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 2) 東 洋一「中臣遺跡80・81次調査」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 3) 『帝王編年記』巻第九 齊明天皇 三年丁巳「内臣於山階陶原家。山城国宇治郡。始立精舎。」
- 4) 『日本書紀』巻第二十七 天智天皇 七年戊辰「夏五月戊寅朔壬午。天皇縱獵於山科野。大皇弟。藤原内大臣。及群臣皆悉從焉。」
- 5) 内田好昭・高橋 潔「中臣遺跡74次調査」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 内田好昭・高 正 龍・東 洋一・堀内寛昭「中臣遺跡79次調査」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

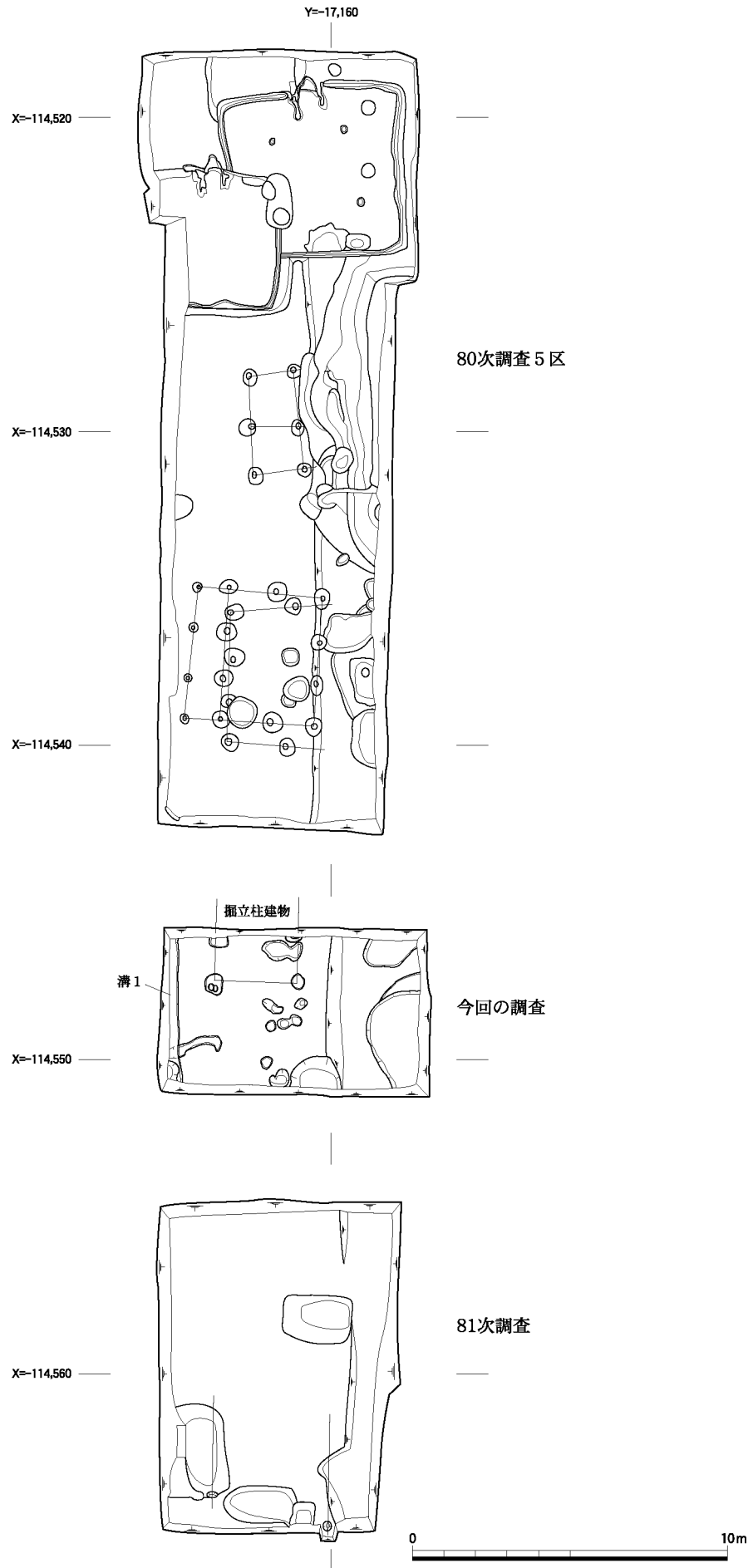


図9 今回の調査および80・81次調査遺構配置図(1:200)

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかとみいせき							
書名	中臣遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-1							
編著者名	能芝妙子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかとみいせき 中臣遺跡 (82次調査)	きょうとしやましなく 京都市山科区 かんしゅうじ 勧修寺 ひがしくるすのちよう 東栗栖野町	26100	632	34度 58分 02秒	135度 48分 43秒	2005年3月 22日～2005 年4月8日	45㎡	道路改修 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中臣遺跡 (82次調査)	集落跡	時期不明	土取穴、風倒木跡	土師器、須恵器		古墳時代後期の土 師器長胴甕が出土		
		平安時代	整地層、土塙、溝、 掘立柱建物	土師器、黒色土器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-1

中 臣 遺 跡

発行日 2005年 6 月30日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961